

分析アジア哲学台湾派遣参加報告書

京都大学文学研究科2年 市來昌冬

報告者は2019年3月17日から25日まで、台湾派遣に参加した。この台湾派遣での体験について、以下に報告する。

① プログラム内容

18日から19日までは政治大学で行われた International conference of phenomenology and Chinese philosophy に参加した。21日は台中の東海大学でのワークショップに参加し、22日は台北の陽明大学でのワークショップに参加した。23日は、国立台湾大学で行われた台大と京大の合同の graduate conference に参加した。報告者は23日の graduate conference において、“How Husserl solves the paradox of human subjectivity?” というタイトルで、博士課程3年の山森さんとともに共同発表を行った。

② 学習成果

滞在期間中を通して様々な学会・ワークショップに参加させていただいたが、台湾の学会・ワークショップは日本の一般的な学会・ワークショップと形式がやや異なっており、各発表者に対して事前に「コメンテーター」を割り振り、事前に提出された論文を踏まえて、発表後にコメンテーターが参加者の前で議論の整理やコメント・質問等を行うという形式である。この形式の違いは、参加者に日本の学会とは異なった姿勢を要求するため、非常に刺激的であった。また、いずれの学会・ワークショップも英語で行われたため、英語で哲学的な議論をする経験として非常に有意義であった。報告者は過去のシンガポール派遣や台湾派遣に参加してきたが、その時と比べて英語力が多少は向上したことを感じはしたものの、さらなる英語力向上の必要性を痛感した。

報告者はフッサール（現象学）を専門にしているため、政治大学で行われた International conference of phenomenology and Chinese philosophy が大変興味深かった。ここには「自己と他者性」というテーマが設けられており、中国の仏教思想・儒家思想・道家思想等と西欧の現象学とが共通して取り扱うこの哲学的主題についてさまざまな議論が行われるのを聴くことで、自分が普段触れている現象学について異なった視点から考える経験を得られたように思う。

23日の台湾大学での自分の研究発表に関して言えば、人と共同で英語の論文を提出するというのが初めてだったためとてもいい経験になったし、コメンテーターからのコメント・質問が自分の研究内容についてより深く考えるいい機会になった。また、他の参加者の研究発表も、同じ統一テーマ（self and subjectivity）での発表という点では関心を共有しながらも、それぞれの学生の多様な観点からの発表であったため多くの知見を得ることができた。

③ 海外での経験

現地の学生と食事に行き、哲学に関する話の他にも学生生活についてや台湾と日本の文化についてなど様々な会話を楽しむことができた。

また、日本以外のアジア圏では、中国思想が日本のように単に文献学的にではなく、現代の哲学議論の道具として用いられている。それには様々な歴史的経緯があるようだが、この文化的な違いが大変面白いと感じた。台湾大での学会にいらっしやった千葉大の内山先生の言葉によればそれは「中国哲学を中国学の一部として捉えるか哲学の一部として捉えるか」という問題であり、そこには「哲学」という西洋由来の概念に身をゆだねることの妥当性に関する様々な考え方があるのだという。

④ 進路への影響

報告者は現在博士課程への進学を希望している。海外の学会の日本との違いを体験することができたことは、海外の研究事情を知るという意味で意義深かった。また、研究者としてやっていくためには英語で議論ができることは必須であるが、今回はそのための経験をつむことができた。今回の経験を活かし、今後の海外留学等も視野に入れつつ、研究者として力をつけていきたいと感じた。